

第 6 8 回 近畿地区大学建築系学科
卒業設計コンクール応募作品一覧

平成26年4月9日
日本建築学会近畿支部

No.	作 品 名	学生氏名	大 学・学 科	図面 枚数
1	「犬ノ島フローティング・コミュニティ計画」	菅原紗亜耶	京都女子大学 生活造形学科	1
2	いつか、もういちど『見るケシキ』	宮崎 瑛圭	滋賀県立大学 建築デザイン学科	3
3	埋立地を育てる建築 ー海岸線を持つ都市の在り方ー	河崎 菜摘	京都工芸繊維大学 造形工学科（建築1）	8
4	産業遺産としての既存プロパティの再生活用 計画-近江八幡市瓦常工場跡を事例として-	中本梨紗子	滋賀県立大学 生活デザイン学科	5
5	北木採石トポフィリア	小林 璃央	神戸大学 建築学科（建築デザイン）	6
6	11坪からの足し算 ーコアハウスによる被災集落の復興ー	坂本 晃啓	和歌山大学 環境システム学科	3
7	忘れない場所 ー兵庫県養父市明延集落に おける鉱山遺構を継承する空間の計画ー	住友 妙子	明石工業高等専門学校 専攻科	6
8	「普通」の動物園 ー枠の在る社会に対しての枠の無い動物園-	春田 滉弥	大阪市立大学 居住環境学科	10
9	世界の「極地」に建つ住宅 ～第2の建築～	物部 拓徒	摂南大学 建築学科	9
10	OMoMA 大阪御堂筋における近代美術館計画	松下 和輝	関西大学 建築学科	8
11	捨てられた建築と記憶の器	山田 航平	大阪工業大学 空間デザイン学科	8
12	九年間の旅路	橋本 阿季	神戸大学 建築学科（都市デザイン）	7
13	水辺でつながる自然体感ミュージアム	福嶋 芽	武庫川女子大学 生活環境学科	8
14	「ハレとケ ー伊根浦の転換する建築ー」	青木 洋美	京都府立大学 環境デザイン学科	10
15	オワリカタのススメ ～自分らしく生きるための空間～	入江 綾	摂南大学 住環境デザイン学科	5
16	□本の庭	戸谷 知里	京都工芸繊維大学 造形工学科（建築2）	9
17	ゆずり葉 ー工場から高齢者・子ども施設 へのコンバージョンー	坂之上佳菜	兵庫県立大学 環境人間学科	6
18	このまちを繋ぎとめるもの ー堺市東浅香 山地域コミュニティ継承による集住提案ー	田中 佑奈	武庫川女子大学 建築学科	9
19	House iD	森山 明	京都精華大学 建築学科	5
20	倉庫の黙示	安福 和弘	大阪大学 地球総合工学科	7
21	時の渡し舟	梶山 雄大	立命館大学 建築都市デザイン学科	8
22	Ground-scraoper ー淀城跡共同墓地計画ー	三原 一哲	京都大学 建築学科	13
23	まちのおかあさん ー19の家族とまちの人がつくる予防診療処-	江端 佐知	大阪工業大学 建築学科	6
24	まちとスポーツ ～地域をつなぐ開かれた体育館～	高田 幹人	京都造形芸術大学 環境デザイン学科	8
25	つながる学校のかたち	山村 梨絵	奈良女子大学 住環境学科	6

(受付順) 以上25点<No. 欄に○印のものは入選作品>

日本建築学会近畿支部
平成25年度近畿地区大学建築系学科
卒業設計コンクール（第68回）審査報告

審査員長 内海 慎介

平成26年4月9日（水） 審査会場・大阪科学技術センター（7階700号室）

審査員長（互選） 内海 慎介
審査員 荒井 庸行・上羽 一輝・大西 久晴・岡本 隆・島崎 清秀・三好 裕司
(50音順)
応募作品 25点（別紙参照）

審査経緯

審査をして作品を選ぶという行為は、審査する側からのメッセージであり、こちらの見識も問われるものである。特に複数の審査員の合議制による今回のようなケースでは、ある種の「総合評価」に傾かざるを得ない。従って、テーマの着眼点（プログラムや敷地の選定）、建築的表現や空間の魅力に翻訳するデザイン力、それを限られた紙面に効果的にプレゼンテーションする力がバランス良く揃った総合力が問われることとなる。入選作はいずれもこうした観点に応えた力作で審査員の合意を得て入選を果たしたものである。

審査経緯を簡潔に記すと、今回の応募作品（25点—うち1点は工業高等専門学校）を先ず7名の審査員（当日欠席の1名は事前投票。）の投票を行い、得票のあったもの15作品を出席者全員で討議して選別し、8作品を候補作とし、より詳細な討議を実施したうえで、上位5作品について再度投票を実施し、上位3作品を入選とした。（入選作品については個別の選評にゆずる。）

惜しくも入選を逃したが、「北木採石トポフィリア」（興味深い設定と魅力的な表現力。ただ提案された空間には、この場所の特徴を十分に生かしきれていないのが惜まれる）、「まちとスポーツ～地域をつなぐ開かれた体育館」（京都らしい露地状に展開するネットワークとしての施設像とその核となる体育館の説得力ある提案。体育館のデザインについて評価が分かれた）、「Ground-scra-per—淀城跡共同墓地計画—」（ユニークな場所の着眼、美しい配置、を高いレベルの表現力でまとめられている。墓地という用途設定に疑問が残った）、「埋立地を育てる建築—海岸線を持つ都市の在り方—（新たなランドスケープとしての所作を加えることで詩的な心象風景を提案）、「いつか、もういちど『見るケシキ』」（場所の課題や環境の特徴を考慮した素朴ではあるが的確なデザインで説得力があった。）はそれぞれ印象深い力作であり敬意を表しておきたい。

当コンクールも含めて、近年、様々な場で優秀作品紹介の機会が増えていることもあって、作品内容、プレゼンテーションレベルとも二極分解しているように感じた。複数の上位作品の傾向として、表現や内容においても、先例の影響の顕著なものが見受けられ、やや白けた気持ちになったことも書き留めておきたい。

（内海）

審査概評

今年も審査にあたって全体的に感じたことは、コンセプトやプログラムをダイアグラムなどを用いて巧みに表現しているものの、それらを建築の造形として昇華する上で、デザインに立ち向かう姿勢に物足りなさを感じるということであった。多くの方が社会に出て建築に従事されることになると思うが、コンセプトをかたちにして美しい建築として作り上げる、その変換の行為そのものが建築に携わる喜びであり、課せられた命題であることを意識して建築に挑んでいただきたい。

審査に当たっては、応募25作品に対して各審査員が5作品を選定する第一次審査で15作品が得票したが、その得票数が1票から得票数の多い順に、票を投じた審査員が投票理由を論じるかたちで議論を行い、5作品に絞り込んで第二次審査を行った。審査員が5作品に対して3票を投じた結果、「九年間の旅路」「△本の庭」「時の渡し舟」が選考された。

これらの3作品は敷地選定に始まり、コンセプトやプログラムの設定、それらを建築としてデザインすること、さらにプレゼンテーションの質の高さを感じさせる作品であった。特に「△本の庭」については、京都の紫明通りという敷地の選定、そこに創り込まれたプログラムと建築としての造形、それらを表現する模型と図面の密度とまとまりがその実現可能性の高さと共に非常に好評であった。

(上羽)

九年間の旅路

橋本 阿季君 (神戸大学)

小中一貫校の新しい形(「かたち」だけでなく理念も含めて)を提案しようとするものです。

理念には、様々なキーワード(環境、運動、生活など)を与え、そのキーワードをつなげる「みち」がメビウスの輪のように無限につながり、それが造形の出発点になっている。

敷地を琵琶湖湖畔に設定し、環境共生を目指すものにもなっている。

理念を繋ぐ形が、そのまま建築になっており、一見、安易そうに作ったようであるが、模型を作ったうえで検証もされており、建築物としての造形、構成力もしっかりしているところは、好感が持てる。最終ページには、その断面計画を展開図風に描き、その展開図をさらに展開して学校の中の施設、学校生活(カリキュラムの説明も含めて)を手書きパースで表現している。

楽しい教室内の情景がうまく描かれていて、作者のアイデア力、デザイン力、表現力を垣間見ることができる。

ただメルヘンチックなイラストで、建築的な表現ではないところ、また先ほどの形を安易そうに作った点は、賛否が分かれた。

いずれにせよ表現力、構想力、構成力のすぐれた作品であり、多くの票を集めたことは当然と思われる。

(島崎)

本の庭

戸谷 知里君（京都工芸繊維大学）

かつて琵琶湖疏水が流れていた京都の紫明通りの中央分離帯に計画された図書館の別館である。この地域の既存図書館は狭く、老朽化が進んでおり、住民からも求められていた施設である。ゆるやかにカーブした、幅 20 メートルほどの中央分離帯に建つこの建築は、見過ごされていたこの場所の魅力を見事に甦らせている。静かな周辺環境との関係性をきめ細かく読み解き、既存樹の位置、周辺街路、空地などから建築配置を導いており、まさにランドスケープからのデザインプロセスを感じる。既存樹を避けて形成された「本のみち」、外部での緑陰の読書空間、樹木と向き合うレベルに浮遊した読書小屋などがひとつのシーケンスを創り出し、子どもからお年寄りまで楽しんでいるシーンを想起させる。最小限の建築的要素から最大限の多様性を創出している印象がこの作品を貫いており、さわやかなプレゼンテーションにもにじみ出ている。

コンセプトで触れている通り「本を選ぶ」や「本を読む」という異なる行為にふさわしい空間を追求しており、図書館の新たな形式を感じさせるとともに、この「本の庭」はこれからの社会で求められる「しなやかさ」をあわせもつ作品として評価した。今後の作品も楽しみである。

（荒井）

時の渡し舟

梶山 雄大君（立命館大学）

鵜飼で知られる長良川の伝統的な港町が、交通・社会環境の流れで変質しつつある中で、伝統的な建築形態と共鳴する形で伝統産業拠点や船着き場などを設けて観光的な魅力を強化し町を再活性化しようという提案である。

今回のコンクールでは、伝統的でバナキュラーな町の魅力に着目し、それを保全・継承する提案がいくつも見られ、若い世代の伝統的建築形態・街並への興味の高まりを感じたが、その中で、伝統性を強く尊重しながらも、それを現実的で力強い建築表現へと昇華するという困難な課題にうまく成功しているものとして選ばれた。

模型が魅力的である。単なる「コンセプト」ではなく、複雑な部分の一つ一つが、しっかり考えられ作りこまれている印象が、人をプロジェクトに引き込む。伝統建築形態についての真摯な研究の跡も感じさせる細やかなプレゼンテーションは、圧倒的説得力を持って各審査員から高い評価を得た。夢を描ける実務者として、充実した研鑽の過程であることを感じさせる。

（岡本）